



綱流抄  
 三條西家  
 御幸

20  
 150

特別  
 へ 2  
 4867  
 53(1)





溪山行記

卷之

一

二

三

四

五

六

七



...

...



桐葉

伊つれ乃清時より



題号事既多し忘れも唯源氏下  
 を忘る事おぼや又を古今序より山  
 水のたゞそ原としつらうも水のみを成  
 つる也山谷詩は源江初盤躰入楚の毛  
 彦と云うは是は女のそれく書されと其  
 心清らうもる也凡法抄よりく志をきり  
 仍畧之卷名を花鳥よみくし  
 教詔は伊勢集よりつれの清時より桐葉を以



可と周を記す爲よと云ふは毛と  
事いづれは古時と云ふは時要、醍醐  
乃清時をさしと云ふ也高明云左遷の  
力と云ふは清の力と云ふ書也統  
此地諸のさし人日と云ふは  
書と云ふは記と云ふ皆以下東歷と云ふ  
と云ふかきや表作地諸と云ふは孔子寓  
言によつて又云ふは虚説なきなり、司  
馬の史記の筆法よぬり好色の人と云ふ  
高んこめねほく、好色は淫のなりと

盛者必衰の事なり則ち離解脱の縁も  
地諸の妙なるありと云ふ也 凡そ  
國史ハ三代實録也孝天皇仁和三  
年八月廿二日一其後國史ハ  
清ハ醍醐天皇と云ふは次は國史  
乃心と云ふは孔子の春秋也衰云  
と云ふは魯哀公の周文王の時代  
と云ふは明周文王貞定王の時代  
と云ふは孝王夷烈王以下の事と云ふは  
史司馬遷云通鑑と云ふは夷烈



王廿三年ふむきやむいんを左傳よりく  
てりあるやけ母洛より多清代をきり  
さるしを [ ] なるくちや

更衣 便身の時殿より少好志る人をもと  
達アなるのしよめや

時めきゆふ時めくの時成るるや時互  
よあくるもやまめくをめくきとねあは  
るめむ神いへてわい志家とさるくより  
下流の更衣くらひまへいけりれとま  
詞時時く人の後めの志あへばはまらあ

ある物しよぬ下者の嫉妬のいひ傳もや  
あつてく [ ] なるくちや

まきあき [ ] のらひらむむむむむむむむ  
ちる [ ] のたにうよこ

花鳥のぬらう [ ] ともぬの  
かのやよあるまろむらぬれ二時よみえ  
よこや是に殿付の姐已を愛し周張王の  
塵奴を寝を [ ] のまらるむむむむむむ見  
る [ ] 楊をぬのためとむけ美の長  
伝をまき書ゆけぬ塵奴の輝火のむ



母の親也弟也。姐已に存るありみさるん  
但史記に姐之之言是後い年と何  
尸を姐に云ふは行かぬとらりし  
史記のま謀のたのむさかみし  
そとたなきし け交のよれら人の  
ふしきし

かきあまきふらるる 所りの氣  
色一をたのむさる也

ちち物言は下交の 行をさる  
母さこのこあん 母あ方あんさるのう  
あ

よそをふ切んぶし

おやらり 孤獨のあさるる  
おのあや 母ああさるる

たまのわのみに 源氏君のわの  
花鳥歌を首因

一乃み 東菴院  
左大后 弘徽のの

とせをり 宗言也

この所をほむる 泰稷ふり  
明德惟馨者とらるる人の威徳



を向ふといふ也

ねたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

中へあつたおぼへは

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

中へあつたおぼへは

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

一乃女といふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも

ふたふといふもいふも



くらりきし馬道に板をこころい

名をさきき花をくしたる

後凍殿 凍乃字存くと讀み行ぬ

くしこわく文夜誰と句

くみうもまへん ころめわ板凍殿は

更衣乃可し

けみこまのよまら給 三歳着袴例何人

まはる前 文存のり也 更衣くる人

こころたれまらんぬのれは息およまら

かこは油添えつらくはまふしこわ

立育つるのちるの字法はわ

たらしめしはまらくもちをまらるる

寝のしほしおのちよむこわゆる

いぬいぬやわらわらあはれ

まらるる世路くとまおよゆとの

法あまし一可あり

あまやうこころをこころと 更衣の

たれまらんぬの遠あつて源氏の

こころあつて源氏の

日たのめき あらはるる



なまじゆ也

てふゆの宣言 一 元就下也

明乎と云 ありあの事 ありき也 時よのん

まへ裏なる事也 海にきき 元就下也

いとく子孫くまふ 元就下也 子孫くまふ

たの事 只のほうよありあもふ 思得也

きのみ子孫くまふ 元就下也 子孫くまふ

乃西船のたき 元就下也 子孫くまふ

もるもあはれ也

はらへんきき 元就下也 子孫くまふ

い 兼下 史衣の甲のく 修法をせむと

て也 是れ かく 思食よ ありあもふ 思得也

ゆえにせたまふ 一 元就下也 子孫くまふ

みこころも 世服何誤也 元就下也 七歳前

人眼志の事 強翻所代法をたす 元就下也

あふあはれまわら 是れ 元就下也 七歳前の人

元眼志の事 ありき 元就下也 子孫くまふ

あふあはれまわら 是れ 元就下也 七歳前の人

あふあはれまわら 是れ 元就下也 七歳前の人

あふあはれまわら 是れ 元就下也 七歳前の人



とわらふは人とも

おもしろし。いさるは見え。昔の葬事也  
此のまじふは。母君の心也。いさるは。是  
ひさるは。一向也。

三位乃々。お三のいさる。おと。是也。

と海あり。と海をいさる。海客の心也。

よ。おわ。人。の。い。は。く。は。く。も。好。也。

あ。い。さ。る。は。い。さ。る。

清。さ。る。の。心。の。あ。の。地。人。の。清。さ。る。の。心。也。

あ。い。さ。る。は。お。わ。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。衛。門。の。心。也。松。道。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。

い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。い。さ。る。の。心。也。



若のちくたう ありふたう ちかふたう  
ふたうたうあり

かみしつふも ちか人も ちかふたうあり

あまの ちかふたうあり

あまのちかふたうあり 母君のちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり 会館のちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり 母君のちかふたうあり

あまのちかふたうあり 是よわ 勅書のちかふたうあり

あまのちかふたうあり 文中のちかふたうあり

あまのちかふたうあり 川あふちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり ちかふたうあり

あまのちかふたうあり 会館のちかふたうあり

あまのちかふたうあり

あまのちかふたうあり 母君のちかふたうあり



とくらくわく 更夜在夢のつねに  
きもくろく 浄清息まじり 唯今とけけ  
さる年の心使とあけきまや

ふこい海さる 横死やあまがに 家の甚  
まじくよ人のさあさるしもくえさあ  
とねむささるこや

くうえいづい 家の甚まきよりうい  
と是もくのさるや

うもさるあえ 命ぬのるや  
くぬのさるまけさる けさるあわもあ

月いづらあさる まる又附木のけさる

よさるさるさるさるさるさるさるさる  
あさるさるさるさるさるさるさるさる

あさるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさる



うらりあある物や

うらあひのまじりてうらまの親なる人  
まじりてまじりてまじりて

松屋のこもせぬまじりてまじりて

清定寝あさるまじりてまじりて 倉田

美代泳たゆまのり

ついでんさいけまの一名をまじり

長松の清急 花多よまじりてまじりて

不見りて花凡け油清よ書下 別紙松

あまうり 栄花油清伊同云た近のあま

も昔の長松あれ油清もまじりてまじりて

とあひく松屋まじりてまじりて

まじりて 子のまじり

いそまじりてまじりて 母君のまじり

あまのまじり 衣のまじり

まじりてまじりて ち美玉才二三句清のまじり

くまじりてまじりて 松屋のまじり

け花のまじりてまじりて 油清のまじり

うらまじりてまじりて 花子のまじり

いそまじりて 清門のまじり



くんも月日 可んもくあつ世にんあつ  
きれのひし

明之親の心いえ 大御の志ん母君の  
あつていふやして行ゆ也

かたもあつていふやあつ 母君のあつ  
あつていふ也

あつていふやあつていふやあつていふや  
たつていふや 幻洲のあつていふや

あつていふやあつていふやあつていふや  
あつていふや

あつていふやあつていふやあつていふや  
あつていふやあつていふや

あつていふやあつていふやあつていふや  
あつていふやあつていふや

あつていふやあつていふやあつていふや  
あつていふやあつていふや

あつていふやあつていふやあつていふや  
あつていふやあつていふや

あつていふやあつていふやあつていふや  
あつていふやあつていふや



てや、實ハ更後のもとけさけさいおんせ  
源一和の字殊時あり

大床子 朝餉ハ女席の陪膳大床子の御

人の陪膳や、つねも、後もこれさへ

ふの御もに、われも、其の御おの基く

も、たて、比、文、夜、の、も、よ、われ、い、ま、ま、い、を

ま、け、さ、る、も、も、あ、り、は、好、境、の、久、夜、を、い、

に、ま、り、源、あ、の、た、く、い、あ、る、く、

人のみまのたが、行海玄宗と有玄宗ハ  
縁山、乱の故則位とありて、南宗修とて

源一和の位を、や、さ、わ、源、い、ま、ん、の、心、

月、足、入、て、く、ま、さ、く、り、源、い、和、源、氏、君、

傍、了、こ、ま、わ、源、い、和、末、薩、院、源、也、醍、醐、源

代、より、東、家、の、末、子、保明、豊、記、之、好、慶、頼

王、立、坊、又、早、世、と、い、は、末、薩、院、立、坊

女、御、を、い、ひ、和、ら、井、源、和、弘、徽、殿、の、心、算、坊、世

の、御、和、を、い、ひ、の、こ、更、夜、の、母、君、源、氏、君、の、祖、母、

こ、乃、こ、い、ひ、和、を、い、ひ、源、氏、君、更、夜、よ、い、れ

源、氏、に、行、の、こ、も、あ、る、も、あ、る、を、い、ひ、

い、思、ひ、さ、る、ん、愁、傷、を、や



女みこころあこお 朱羅漢の所一勝  
字多乃みよの印まきあ 竹花ホよみなわ  
鳴臚館 何花見こわ今今今の家と所の  
太夫弁の子 ろん乃物活を相人太夫弁の  
子とてあより有

四のねやとあうて又その空下たふし  
は照花をばうて言いそあわ四のねやと  
あうてあわあうて天下をたふす  
こころあこおまねたあこたふし  
弁をいそまきこまき まいこま字清くさう

一條禪周印あこおまねたあこたふし  
濁り聲をうたふてあわこたふし  
乃をのこともまも字濁也

つぎきをう地 け進地梅くそに洲はを  
アまをふし 和国の相人をまよとて  
そあ親との外尺花  
いよあうちのまきあ 天下乃たふし  
まよあせぬりまよあくぞいそや  
まきあ印 斎曜師人の運余まよあ  
天帝 系苗よあ



三代のまつへは行末を存す多醜醜と

あり終らざる三代はあはれとくいえたあは

御さくらんえ ころよさくもや

いへりこし へりこし

まきされもる世路ぬ 有意の母所也

共々ののみ、 世を又し好よゆりつ

くれば人のきこるゆきりて相臺交衣ハ族性

さもたなきいふらんもさるる〇〇〇〇是族

性人〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

相好相好相好相好相好相好相好相好相好相好相好

もらわらあひぬくつに 世路こられ申よ有

意ハ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

とるやと前名 源氏の君交衣の 面影ハ

相好相好相好相好相好相好相好相好相好相好相好

よつるれさる〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

くもつれりあは、 ころあはらるる源也

有臺もまいつれも大印ハ思好也

こきせん乃女所又この象も交衣の好ハ源氏

を思ゆり終りてをけ有臺と申人

をん終らぬよわたらうう源とく〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇



名たう〜れたる所ら 弘徽等のまゝのたふ

のや〜はのまゝ 丸

たう〜まのた 清徳のた 何

たのた〜人 丸

〜〜〜まう〜たの海 素文のたは眼南の

〜〜〜堂と〜〜〜群あり是は堂下也

あるは〜皆後をた〜次等ありされ

唯源氏の客は源氏と感らるるは

ま〜〜〜 何とや

た〜〜〜 今〜〜の大目

口路〜〜〜 今〜〜の大目

〜〜〜 今〜〜の大目

〜〜〜

〜〜〜 養上の事

〜〜〜 昔の事

〜〜〜 源氏の事

〜〜〜 源氏の事

たう〜たのた 何

〜〜〜 何

〜〜〜 何



女君いささうしき

夢とて源氏よりの兄

け年のまじりしきも 死後続夢とて心せし

今人のあふ ねの致仕のねとや

おほくなく 念ひよと

まことのまの 欠衣の里やねと三途院とや

ねまよまゝあんなと 一筆たふさふやうたら

くまや又若臺の心あり

あふ君と 源氏のまのまのまもあふやう

西三条大后源氏とて仁明天皇御子

あふ人

とあふん 業部御秋まじりし事あふ人よと

あふもや何れもまじりあり



帚木

源氏十六歳桐壺巻の十二歳のりまゝ  
ちぢみみじむ位同巻の奥にほれは成給  
てのちいとさきよりのれは後理織たうそ  
つもとに宣旨さうたうよあゝあためほくも  
ゆふとありゆふ十三日丑乃年の事名桐壺  
乃ちくまこちり侍り  
巻名何れ帚木のりまゝのりまゝ  
ちぢみみじむ位同巻の奥にほれは成給  
てのちいとさきよりのれは後理織たうそ  
つもとに宣旨さうたうよあゝあためほくも  
ゆふとありゆふ十三日丑乃年の事名桐壺  
乃ちくまこちり侍り



とされいふさありぬましくれり相違  
其の序のまじもりたはけを地階の序  
りや作志のわご威者必裏のりけ題  
号にちまわく凡そ子明蝶の度代物もけ  
ありよむあらん世回を唯帯あな  
まうて身は浮揚まね海るとみくを  
支原氏名のところへ何れよ名のり  
ちこ漢まきくまうまわつて心は  
つるりもろくもるや人を  
くくしぬらん人もいひまらぬ  
同の有様や弘徳の方さ海よ  
路をやさわく唯云界へ平れ  
好色し又同好よつて  
はる事ともはる事とも好色し花も支原  
氏も名もはる事ともはる事とも  
のろくたさ志のり花も  
高麗人よ相やあはれ  
川野将人給きんしとまき地階の作志の  
標端やそのわの託あり地階の名も情  
の袖を枕を子よみくは川野の



天性好色をくくつらん人の力だけ源氏の  
君はくはさるる下には好色の心あるも  
まに中ねさるゝお双紙の句やと源氏の  
當官中ねや給へけい文字は五去れ  
ふまのくくし柳の心さるる松さるる南天  
の心さるる書力常力也

まに心よとて 信らうて可し

相原の心よる 葵の心所也相葉も

しらさるる心よるまらう相原の心あり

まの心よるまらう 日表の心あり

心よるまらうと葵と心よるに思疑つるも也花

花葉女侍の心よるまらうと心よるまらう

つらう心よるまらう

まに心よるまらう 花の心よるまらう

心よるまらう けい文字の心よるまらう

氏の君本性をあらうと源氏の心よる

まに心よるまらうと源氏の心よる

源氏の一生の心よるまらう

あゝ毎 花の心よるまらう

あゝ毎 心よるまらう



むせむせのまゝに  
身ころや

はとのめお 源氏らのみせらや

まゝの中ぬ 好よ好仕のねこや 桐葉所

門のいゝと三まの所暖

ちあねの 弘徳の家の娘やけねこれに

君はまゝの中ぬあゝもねやけ君も地

うぐれとよけに君がいゝも思治はあこ

めさぬと源氏の夢にににやと路ぬ

ねあやとせとねら

まきく けねあよもく用あるや

まのうのこまわもえをう次 ころあへい

つひねよせよまのうの弘徳をいひま

まよひねあやのこまわもえをう次

礼ならねあつと也是則志のまあつ物

活あたらとけのまよひねあつ物

はとのみお 桐葉のまや

あまのあまの心路 け文の書お籍や

あゝのうらな文 是の艶書を

かこなる人まき

其の中よんる











ちりくし敷下おと家とおふらおふらへん(おふらへん)  
それの中のおふらおふらへん(おふらへん)  
このおふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は

あつらひおふらへん(おふらへん)は  
まんのおふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は

このおふらへん(おふらへん)は

おふらへん(おふらへん)は

おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は

おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は  
おふらへん(おふらへん)は

おふらへん(おふらへん)は



いそいでいそいで 是は地巻の作者の約し  
坊の所をいふ 是馬のいふ所をいふの  
と詳也 音字のさうのさうの世間をいふ  
はまのいふことおきくことおきくこと  
是地巻のいふことおきくことおきくこと  
さねていふ 是思とていふことある也 惟夫の  
女房のいふことおきくことおきくこと  
又もいふことおきくこと 是地巻のいふこと  
さういふことおきくこと 是地巻のいふこと  
いふことおきくこと 是地巻のいふこと

ちやていふ 其のいふことおきくこと  
あはれいふことおきくこと

さういふことおきくこと 好のいふことおきくこと  
いふことおきくこと 國のいふことおきくこと  
年ついでいふことおきくこと 是地巻のいふこと  
勢をいふことおきくこと 是地巻のいふこと  
権守也

さういふことおきくこと 是地巻のいふこと  
いふことおきくこと 是地巻のいふこと  
いふことおきくこと 是地巻のいふこと



あゆみのんこらあ　さあましくたぬありは  
こゝろえふふさふさあつらんや中納言  
係はこゝろの人も

非系議　系後をもあつて三位に位も  
そよの強き　明入道もあつり  
いとがらう　こゝろやあつちや

家のこらよ　さよ次を何人も首略を次  
まゝこゝろまゝ　明石らの頼もつらん

まゝつらん　桐壺の文友もあつらん  
まゝこゝろまゝ　源の借しお給ひ　田舎

まゝこゝろまゝ　家の内もたゝあつちや  
あつちやまゝあつちやの約也

こゝろのいそん　中納言の約源は好色の男  
うしんこゝろの約源は好色の男

そよの志が　馬及約け船女三交もあつち  
まゝこゝろまゝ　鐘物の皇女もあつち

まゝこゝろまゝ　次もあつち  
まゝこゝろまゝ　次もあつち

まゝこゝろまゝ　次もあつち  
まゝこゝろまゝ　次もあつち



あふくき人せうたにのいふおのれし  
女院子あはれわらう  
傳書

心たれらうくまう  
是にせらわらうくまう  
まにわらわえりてほきくまう  
あはれ  
あはれをふくま  
まにわらわらうくま  
まにわらわらうくま  
まにわらわらうくま  
まにわらわらうくま

ちのこたにけはねはまらうくま  
あはれ  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま

きゆし大いそまらうくま  
あはれ  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま

あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま  
あはれをふくま











花多可重くいひら  
 馬次世に  
 柳相傳  
 上福  
 花多可重くいひら  
 馬次世に  
 柳相傳  
 上福  
 花多可重くいひら  
 馬次世に  
 柳相傳  
 上福

花多可重くいひら  
 馬次世に  
 柳相傳  
 上福  
 花多可重くいひら  
 馬次世に  
 柳相傳  
 上福  
 花多可重くいひら  
 馬次世に  
 柳相傳  
 上福







女の心をなごめし、男の心をなごめ  
し、女は女、男は男、

女は女、男は男、女は女、男は男、  
女は女、男は男、女は女、男は男、

女は女、男は男、女は女、男は男、  
女は女、男は男、女は女、男は男、

女は女、男は男、女は女、男は男、  
女は女、男は男、女は女、男は男、

女は女、男は男、女は女、男は男、  
女は女、男は男、女は女、男は男、

女は女、男は男、女は女、男は男、  
女は女、男は男、女は女、男は男、



人のそもよろく又侍者朋友をよ  
くらわしむるありあはまきよ  
流しをくまらぬ

思えこく 宿を思ふありあは  
こもよろく 宿を思ふありあは  
たひのこく 宿を思ふありあは  
よわきあはまきよ 宿を思ふありあは  
延平わたはまきよ 宿を思ふありあは

ほろのまらぬもよろく 宿を思ふありあは  
て田のたあまきよ 宿を思ふありあは

このまきよ 宿を思ふありあは

たうあまきよ 宿を思ふありあは  
まらぬもよろく 宿を思ふありあは  
あまきよ 宿を思ふありあは

つあまきよ 宿を思ふありあは  
そのまらぬもよろく 宿を思ふありあは  
まらぬもよろく 宿を思ふありあは  
まらぬもよろく 宿を思ふありあは

海にたあまきよ 宿を思ふありあは  
け約一節の行



乃由花鳥よちるせり

<sup>孫</sup>まらけ

倭人色

地まぢやふたしによ 養を世にふと人ぬ

あししを

ゆよーゆーゆーゆーゆーあは

ふしらふらふらふらふら 養ふよあは

えんよ地をらふん 是は伊路地清のそ

いあふらふらふらふらふらふらふら

女のたふらふ

うんふらふらふらふら 匿忍交其人と云

うんふらふらふらふらふら 夕日の上あは

うんふらふらふらふらふら 了次切の時昔地清

うんふらふらふらふらふらふらふら

うんふらふらふらふらふらふらふら

うんふらふらふらふらふらふら

うんふらふらふらふらふらふらふら

うんふらふらふらふらふらふらふら

うんふらふらふらふらふらふら

うんふらふらふらふらふらふらふら







縦めく繫をく如よ男の<sup>ひ</sup>りもあめ  
ひくく繫をくくくく

つふぬ舟 鵬鳥賤 何海

さあさうし 花中七咲る次約さう  
くれさうし 乃ちぬのゆや 男のうよみ  
既あねも唯わよみうきや <sup>脚月</sup> 既の  
さうさうたうきさ こそし 既儀使ん  
既りくし けり 葵との松原よりく 既る  
とねいふこれさ

君のうら好あり 源もく思ひぬん

地のささめれさせ 末晦庵博士とハ字官

名<sup>堂</sup>聿通古今は昔も古今よらう道  
うらうのわよさうく くる次の前也  
人の心もさうしんえんえんくわわ  
確言もをらうしんえんえんくわわ  
とをぬえん巴乃道も申ゆえんせたえ  
まうんためや 既るもをみるのるま  
もさうんハかきまきさう

えさうきされさう されハ左道のさう  
既巴け確言よさうんえんたうわわ



みじくやそれをもたせしむる也  
大事しき人の本意なる人こそこれ  
とてならぶとて人の心をよもす也  
世よありしとて也

又繪也。是は繪を以て着色にせし  
る也。ある也。是繪を以て也。

つぎくよのよもくして也

ほらぬら 真意をみせし也。あり

きとる也 河海 韓子とて後漢書

張衡：七益工要圖大なる而作思懸誠

以實事難秋而虛偽不窮とて也

ふらぬら 濃淡よらぬとて也

書也 花 金器とて又重とて也

くらぬら 前載を也

心とて也 是人の本意

くらぬら也

くらぬら 是よわ平添を也

ゆこのむら 唐相宗同筆法

柳云權曰正則筆正とて法矣とて

くらぬら ありし也



















見く〜のまろ

笑高藤時のみ

〜〜みろ

鴉よ好語ある

海うろ

別也

家路とねん

るみり〜

日〜

内裏し

〜〜

神の地あり

〜〜

本指め

〜

指〜

〜

さらた

力〜

面白也

〜

〜

ねん〜

〜

〜

本丁也

〜

〜

〜

〜

〜

〜

わ〜の家

苗守の意折し

わ〜

花をわ〜

家〜







わしために海へかきこらせ

さうも思ふあはれしものもほつらん

てあつたしつゝまゝにまゐる

つよいきえ かくいふんをふりかき

のまひきえよつねにゆかりをた

よふらんき弱のあえはら

たふれにうらあふらんをんせ

いたふれらん

たつらんをん ちん 縁なつらん

あふらんをん

たふらん ちん ちん

らんらんらんらん

中めそのたふらん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん

之田熊の錦もく又ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん



さうとう及ま—きと—うつとねほし  
たれきし紙綴葉 表の紙綴の綴葉ハ  
造記の志つさゆ人年よおて花子文  
あ—き紙綴葉を文あひあ—たれハ  
乃人なき地不ま—て人の財活—る  
さ—文あひし筒あひし一紙とけあ  
ち切さう—もあゆめさるはよ表紙  
そ—紙綴—たる折し—の文あひさ  
つれもしち—と地色—の—の—さ  
きんもや—と—あ

さし又たあ—う 又地活と—の—あ 本枯の  
うら— ち—し—  
こ—く 昔—はあ—あ—  
こ—あ地 枯—の—あ—本巻—  
えん—の—あ—あ—し—あ—の—あ  
を—あ—あ—人の—の—あ—  
う—の—あ—あ—あ—あ—  
え—あ—あ—あ—あ—あ—  
か—あ—あ—あ—あ—あ—  
大綱—の家 大綱—あ—あ—あ—  
大綱







これらも是にけ女の所入列の人のなま  
きしやうつらやなまの人もあつとも  
繁きなまも我らう尋まのりみまや  
侍れやけけしつらなまのひま  
この移り月も 月波菊をいれ  
つれも面白きなまのたきなま  
をなき人といふなまのなま  
とけきしつらなまのなま  
このつらなまのなまのなま

又儀、女のつらなまのなまのなま  
まのなまのなま 馬のなま

あつらひ まのなまのなまのなま  
をなまのなまのなまのなま  
我らおきしつらなまのなま  
まのなまのなまのなまのなま  
まのなまのなまのなまのなま  
なまのなまのなまのなまのなま  
なまのなまのなまのなまのなま



其は用くはらひのたひせしむる事なり  
いふ事なりとの事なり  
かゝる事なり

清のまゝに  
あつたはらひ  
病の事なり  
あつたはらひ

あつたはらひ

いふ事なり

先と云ふ事なり

ちと年なり

いふ事なり

たひせしむる事なり

あれ地の物なり

いふ事なり

癩の字をせしむる事なり

はれをりしむる事なり

の字なり

慧ノ不辨

不謂白癩

穀  
麦















ひのくしの戸をくつりまはしつゝ釣つゝあそび入  
りけしむねをばやうとれくよこしむねの  
およきあしきかきむねのむねまもる  
るあつゝむねをうとれくよこしむねの  
とじりむねをうとれくよこしむねの

まふのこえ ちのまらや花のほこし  
まふのこえ ちのまらや花のほこし

花のうのる 文集秦中吟 花のう

花のうのる 花のうのる 花のうのる

心はさうとるや

こをれぬ こをれぬ 折腰

花のうのる

花のうのる 花のうのる

花のうのる 花のうのる

花のうのる 花のうのる

花のうのる 花のうのる

花のうのる 花のうのる

花のうのる 花のうのる

花のうのる 花のうのる







おしるい 海とともや 筑もまあると  
日向 真成マコトとあつちあつちまもまもまも  
まあひひあつちあつちたり けり、居る也  
まへて男もあつち 寄つて 松をまもまも  
乃の批判はまも

あつちあつちあつち けり下巻皆人のまもまも  
書やあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

三史五経 聖成あつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち







君ハ人ニシテ 君ハ源氏也人ニシテ人ニシテ  
奮メのこもるもいふはさかさまなり  
思ひ出さるる也

いふはさかさまなり  
さかさまなり

かゝるに なるもいふはさかさまなり  
いふはさかさまなり

いふはさかさまなり  
いふはさかさまなり

いふはさかさまなり  
いふはさかさまなり

いふはさかさまなり  
いふはさかさまなり

いふはさかさまなり  
いふはさかさまなり

いふはさかさまなり  
いふはさかさまなり



まろぬや 源の思人也 花鳥

ありきたりなれぬくろ 源の清極や海の晴る  
一入の思氣もろく

ねしきこころ 源の清むある故よこころ  
もろくけぬきこころ ありきたりなれぬくろ海をた

おろを隔てし源や花をこころを  
ありきたりと 源れきこころと思ぬや

ありきたり ありきたりまやこころのわらひ  
をろくろく対るこころ

ありきたり 中央の華より中節もろく又長節も  
まや 両傷し天一節のまや 内裏も天

まろぬや 源の思人也  
まろぬや 源の思人也

二条院 河内 花 移し世をわらひつれ  
おぼれ柳をこころに用ぬる花もまや

まろぬや 源の思人也  
まろぬや 源の思人也

中河 花 葉花ゆ清む川を叶つる中河  
まろぬや 源の思人也

まろぬや 源の思人也  
まろぬや 源の思人也















うしろのたき

源氏も娘も寝ね

あうの子も

紀伊守の子也

伴よのさるよ

是紀守の子也

十二三ころち

うもるの才小君也

大徳のころち

うもるの才小君也

あうのちや 源のち

まゝの真人也うしろのたき 娘也 娘也

うしろのたき

のらねや 結母也 娘もろもろ紀守

の結母とすね也

まさん 紀守也

よちのちねや 源の初也

まじくよ 父にろもろを交けしむさん

まじくと月も佐あり也行れ

まじの事もあるとありあはれ

あうのち 地ち也

あうのち 世同のあうのち 女に

うしろのたき

あうのち 源の初也

あうのち 源の初也



いづれにこそしるべきに  
を源の神もつとていふ  
私のもも會ぐなまも  
切に強し

我を始に  
源の約

いづれにこそしるべきに  
源の約

源の約  
源の約

源の約

源の約

源の約

源の約

源の約

源の約



似しるや

いふとあひをよしくしるや東國  
婦もわもあ子をいふ来よつる歎也

いふとあひをよしくしるや花を帝遣り行

とく行

わらふもつら 源氏の事も小忠の事也

いふとあひをよしくしるや 瓦礫の事也

いふとあひをよしくしるや 源の事も我をい

とく行

いふとあひをよしくしるや 小忠の事也

女君のたゞの 源氏をきくは根也

障子の窓の母屋の南面との中々

たゞの障子やちひさしに大源氏の

窓の面の方や窓の事、今

源氏の事、いふは

いふとあひをよしくしるや 女席の事也

いふとあひをよしくしるや 源氏也

いふとあひをよしくしるや 中々の事也

いふとあひをよしくしるや 源氏高友也

いふとあひをよしくしるや 中々の事、いふは



















さくらむらさき、けりもかみめ、う中きま  
たうくま、いふれも

ふの顔、たれよ、けりも、まよふも、うら  
あつ、二条院よ、あつ、うら、ま

れ、い、ま、た、ま、ま、う、ま、ま、の、ま、ま  
う、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

うのあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ  
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

を、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
を、た、つ、子、路、や、元、野、の、子、あ、紀、子、う

か、暖、の、才、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
ま、ま、侍、次、紀、守、お、や

た、ま、の、を、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
た、ま、の、を、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
世、の、だ、い、結、母、ら、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ







たのちりく

伴のあや

さうやありきん

小君のあや

ころいりもあ

袋束のあや

これとよのこもいとたさあ

夜郎の貞衣

さるんじや

ほのちりしききん

其清ききん

せうらんもあまきん

らまきのあや

さるんあいらのいも 清くかや

あいら清くさききん 女も清くさききん

ひまや

小君のいそいあや 小君のあや

いそいあや 女の思わさるる疎勝

あやもいそいあや 女の家侍の妻のあや

あやもいそいあや 女の家侍の妻のあや

あやもいそいあや

あやもいそいあや 不用や 小君のあや

あやもいそいあや 君のあや 詠のあや 唯よんのあや

あやもいそいあや 詠のあや 詠のあや

あやもいそいあや



ねるね ぬきやにやーきや早下の心  
下ひにやよまらうしあわらうあつよを  
わしきもちやけぬ肩花ちよ各獨  
しにににわらとあひにん様よとーきし  
をいふまーきや贈答うくあつ人きや  
小思強あしこもあしなもとらよけい候の  
たのさうら  
人すねらよ海 貞さるう人のかひにきよと  
たはよらや  
えれいとたはすけ ころんあわととと  
まそもさるあや

つれあき人あひ 免殿よあにせ  
たはよらとら ころんとに葉取アウ 秋書  
ころんとあしとせしめやけ地清好色  
をひしきやさるわも人のけりらあをさ  
河の妻よさるあらあひまーきや  
心はよく平てみゆ人まらとと



宣蟬

卷名以平号之なるは乃横筆の力に  
 花鳥のみしたるけ美なるきく其のつぎ  
 豎の並る人し其<sup>てん</sup>並の力史記の本  
 記の外に列傳をたえさるにたかた人キ  
 所れ給ぬ申川のやまをゆる給るもの也  
 我々くくよ源氏の好色を自稱給也  
 さるるはさるにほして小思也  
 よのよいころを小思うありさぬるもの也  
 さるるのきくひよさくぬかよひころ也



きみのくもものほまといは原まぬわらわのまぢ  
とやまといは原纏也

かきあましくあらんうらまをたはすこころうら  
まは原のまぢいよとて原のまぢ也

くさくさあまを原のまぢにまぢのまぢ  
まぢいよとて原のまぢ也

くさくさあまを原のまぢにまぢのまぢ  
まぢいよとて原のまぢ也

よまといはまぢいよとて原のまぢ也

とたのりいよとて原のまぢ也

こ君よといよとて原のまぢ也

かぢいよとて原のまぢ也

まぢいよとて原のまぢ也

うらまをたはすこころうら

まぢいよとて原のまぢ也

まぢいよとて原のまぢ也

このまぢいよとて原のまぢ也

あまをたはすこころうら

まぢいよとて原のまぢ也

原のまぢ也



さうかゝあしあしよ

小君うらや

みこのつらみの伴ら介の女房新むの殿や

元殿のまゝもやけ殿の面方にあたり武蔵

こゝろうつらむし 小君う入侍る業戸や

みよ由は 唯ういたるの節よあはれむ

て面のさくそ路や

もやのたうら 是うむかや

こきあやの 花も流る心は実する

あやうあえん 日くさるのうよこきや

云脱あれも唯はけむさうよけいあや

くさるといふもむい 元殿の用さやあし

よりいせしとて 其をういよあし

あしあし行よらるる殿や用さしあし

海にさらけ新垣の殿やたのめ方よあし

よあしあしあしあしあしあしあし

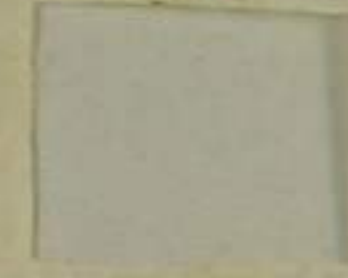
あしあしあしあしあしあしあし

たあもやあし花を二色よあしあし

あしあしあしあしあしあしあし

よきいあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあし



若人あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあし



ろろある まろしたまか  
まわハ、ほろりきらさ海也

ゆらきさらお あまおらなせし

しこうたもの母まき、たぐると一はさる

(まじはあましろたけあ)

らろれきりあまき人、みま海お、用

しこうちや此人た、ろろるこらる也

ちこうしきりあまきりあまのぼり

かこいあまのあまき一、たぐまきり、

たきや、是もまろしき也

たみの人元燈也 座敷のたくらう、元燈

乃心有不審

ちたこうわあ 地と持よの二やおと、お右

ちたこうわあ

しきこのま、けろのまのゆ也

まきののおく 源氏のまろるあ、海也

よのまき、ねたはまき、まき、まきの

甲たくらう、まき、あまのまらゆ也

難病のあやあ掛まき、たり

まら、まきをくらわ、まら、まら、まら



さる事なあしたあしひき

たもくあくふちあひの程也

目まきしとれしうとむらむと睦也ひんた

るる也又目めりああ何也とて

を所るもあまやあぬあまやあふとて

乃たうぬぬよし

このまらむら行きの終せむら元候

いさむらたう也

いさむらたう元候かむらむらむらむら

いさむらたうとてむらむらむらむら

あまいさむら元候行きの終せむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら

いさむらたういさむらたういさむら



さへいよきもや 源氏の御也

あはれあはれなま 小君の御也 けいさくえんてん

さあさあさあさあ 源の御也 ながれわたたの御也

つら君にりてよ 小君の女房の御也

あけまうねや 源の御也

この子も 小君の御也 折る御也

あめつとせいと 源の小君の折の御也 同

いんさく御ん 小君の御也

あー 源の御也

こゝろくくくくを 小君の御也

たもえりくく 屏風をくくく御也

とさちほろろ 小君の御也 女房の御也

いんさく御ん 源の御也

源氏の御也

くく御もえ 源の御也

いんさく御ん

女もいんさく 源の御也

あはれいんさく 源の御也











おぬき次

うき人のきぬき

きつかり

しあわせのたよりいふよき事いふ事

うきうきと小君の思ひは源を思ふ

きつかり

きつかりとこころのうき

いとおと小君の心

あつとあつとあつとあつと

又た次へはけぬきやたらと

乃木とやと自問自答もや死よ痛の

きつかり人きつかり

いとおと

なつとあつと小君の心

あつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつと

いとおとあつとあつと

いとおとあつとあつと

いとおとあつとあつと

あつとあつと



かゝるは 源のこゝろはきこみぬ

ねえねありき 夢子代し

いふ所へして 小君うたふ

伴とぬくにてし 源のゆき

伴らの舟 源の舟にいらぬよはたらき

ありつるこゝろきふゆき 尋ね字を面し

何とぬきたれと 友蝶のつまきし小君

もしいふとたれとわらふ 夢子代

ふいせいの ふうせいの 蝶のちねもはなす

柴舟一中大兄三山歌 唐蟬を鳴す

相格良思吉とありき ぬけよありき

くさきや 其時せいの 字やうき

かゝるもきこむ 小君うたふ

かみのよよと思ふと 好みの歌や

人ふにあり 人きや

きこまれりしも かなのわらふ

花のよと 夢子代し

いふらみきや 小君の心や源と友蝶

伊勢をのあま 夢子代し











山の樞、川面に及、原、曾時を也

あせき、山、河、ゆ、日、ら、き、ひ、や、く、溪、元

唯、亦、も、元、也、山、あり、き、あ、と、う、く、く、あ、た、海、

寺、の、海、も、鞍、も、寺、昔、字、九、院、の、也、也

き、れ、も、も、き、路、終、原、源、の、き、の、終、り、を、命、

あ、な、う、と、や、ひ、ひ、の、あ、り、也

き、ん、この、年、た、し、現、母、の、折、橋、き、と、い、ち

も、せ、原、は、母、の、し、も、あ、う、ち、と、原、を、い、よ、也

は、る、く、ち、地、符、き、と、き、ん、く、河、ゆ、を、う、り、

は、る、く、き、あ、ん、と、あ、り

ま、せ、と、し、ま、う、ま、せ、合、字、也、吸、心、也

松、乃、禁、院、ま、し、き、と、ま、よ、日

つ、ら、折、も、と、の、志、賢、寺、も、ま、る、溪、也

枕、草、子、く、く、ま、の、つ、ら、折、と、い、

た、あ、し、う、え、僧、却、の、傍、乃、ま、る、く、の、了、心、極、也

万、の、力、志、賢、海、よ、あ、り、や、さ、く、く、を、あ、り、

この、ち、業、乱、地、終、是、僧、却、小、山、は、行、終、也

ら、く、屋、廊、也、を、横、は、り、也

この、あ、ま、る、路、三、年、禁、是、の、う、ま、る、を、み、た、

あ、ま、り、や、つ、斗、う、家、原、氏、の、せ、く、く、い、り、











秋野の〜〜〜 入道の秋野〜〜〜

*Handwritten signature*

にの〜〜〜 十〜〜〜

*Handwritten signature*

たも〜〜〜 (多) 多の若あつた

て画母なるもさる〜〜と画〜

〜〜〜 唯海より舟とちよわい

さうあつた花も流よ及〜〜

か子〜 え清也

〜〜〜 平の陰月〜 叙詩とる也

〜〜〜 けえ清〜 遺言とる也

〜〜〜 又〜 停め人の名也

〜〜〜 清〜 せよとる也

〜〜〜 ち〜 ち〜 とる也

〜〜〜 ち〜 ち〜 とる也

〜〜〜 ち〜 ち〜 とる也

〜〜〜 け母の却〜 母の族姓を

〜〜〜 け母の却〜 母の族姓を

〜〜〜 今〜 田の字の可〜







おのれが 君のいふや

見あはれさう げに君うへ世とよ

か納すれめの じうさきの人のめれや

つらきと成し 所添刑経をりさう

いらやとくえ いらんや

いらきあり したるあはれや

かんさーみ 花鳥よたをよ成し

あさぬらう かくまことと成し

あはれ世唯人き 世とよあはれさう

かさるよあはれ 君乃おのれの人を

十さるに せむれを成し

君のいふけ 成し

こいの君を 世とよや 桜窓天細き

かめよあはれ くらさう成し

たひさん 老衰さう成し

さへ草の 弟や

僧部あはれさう せよさう成し

地々の末成し

こ乃世よさう 僧部の成し



しつ御世しつしつ 僧部源(喜信)もまも  
あまれをう人を 源のひやくだまのひあり  
あまかやこの人を又つひぬらもいそま地の  
このまけありまはまもくひよとたはわ  
のみ人乃 敬意よとひさるひまも  
いらうぬらる 源のらやまもぬ  
ひまもあまれえ やまもひまも  
まれい源のやまもぬ  
よまわたりあり 僧部乃使才子のひ  
キるしつこの字や 河海云(ヨキリ)たたりあり

まもやまもめこの字や ことわまも  
凡この字平聲去聲あ音也 野舟も  
この時々平聲也 毛詩才一に有地篇  
云江有泡之子千婦不我過(トヨキラ)又山谷詩  
近積水無鷗路鷗時有婦牛字鼻過皆  
平聲也 米(トヨ)也  
おとらまもまも 源のひや  
いぬう十倉也 源のひや  
かやまも人 知験あ(子)細あるまも  
一験をくそ けいこの威徳をくそ 思所故よ



世のつらき世は是の世の用いぬたかたき世  
に海はあつても僧都のつらき世はあつても  
世の思給時ありとも

世のつらき世は僧都のつらき世  
すき世のつらき世は僧都のつらき世

乃清く世のつらき世は僧都のつらき世

世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世

僧都のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世

世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世  
世のつらき世は僧都のつらき世



物にもひも 僧都の初五真

さしほもまあり さくは辰云乃経也と相違

乃さ乃心もら 昔の交の心もらわねて茶壺

ともよきちうさるにうて似かふし路と思は

人の程も 人々をとまや下原の心

いとわされよ 原の初也

あしぬり所 僧都初也女子乃一人侍也

それよつちえ 辰云けれさ地じらう路と

されも 原の初也

あや〜キカるれと 原の初也僧都の経

思ひあつてと漢切りにいふはまよひと

么にひくく見る人ま也

ましよひまき 死身丁どいふをいふ也

乃あるやよあらん也

いそわ〜まき 僧都の初也

ちも〜 いま〜僧都の初也

阿弥陀佛 僧都の初初也のつと也

たまのよもん 毎よ路の底もいふ也山中

一葉毎樹杪百重泉をいふと

強あ〜ひるら 川聲阿弥陀經なる











村ありて海にけしきとを母よと申す所せ給ひ  
てみあり子ならハたあり類する人ト也  
の物知り侍りかしてあんといふまゝに  
つゝあつていふもいふも也

村はほん何と申すか次と候するも也  
いとくはくく 戸云乃知やか下み村ほり  
ありかしていふもいふも也

キコウめいひつめいさうさうさうあへキニ  
たふぢやいふもいふも年なら人あらま  
まら好子カやいふもいふも知なき人めい  
あら地也

あやしキ身あらを 書とを云せ  
みか村ほりまゝ次 源の物也たといふ  
ゆをとり侍り地を也  
いふもいふも 戸云乃知やか下み村ほり  
いふもいふもいふもいふも也

僧部たりぬれ也 書とを云せ  
吹まらふ 兼也  
いふもいふも 僧部あやもいふもいふも我  
身は年をれ物也いふもいふもいふも也  
あのみたはみ 書とを云せいふもいふも



ひらきいしきや 元は僧部の方人書  
三光 漢明也

ねらる勢みのいとしききしあう 何れ  
きつさきくき切也 切のつりきさる也  
もしをわたりしきまのきけ二と路とあわ

三年経山乃人とみしたる

山本 源の印也

多人 悲玄の書也

いとしきの 僧部の方也 源氏傳自雲鉾

華は比もる也

時ありて 源の秋も早下きくの如也

仰のくよありてのしき也

ひらき 加持の躬也

かく山乃 山標戸まはあ斗てのうはあり

野徳大あ の 僧部川也 物何とさる也

君初らさる 源も皆くよ布施をさる也

僧部つり給へ 慧との力を居云よさる

ちいさきや 居云よさるの如也 ちいさき

給ひしきをほのめし給也

海とさる 源の今と書や給うをみる人さる也



とれの人許をよきとせ

ちれよわ 養子の父たもせ

とよの寺に 山寺よたよみし高のこ

人よわのとれり 皆難なきいと人なよの海

御まきまきいあまきさるせ

はこれ笛をさせ 是に陸男さる

いささうら 海のくのねひつて原ゆ

こたつら君 けきとせ

まの御るさ海 常の父交のわせ

君いさうらよ 常のあつせ

のまやに一日二日 入夜我らと海川ゆ

あまを 養子のいさ

女君 あまのいさ

たつた後よとまきい 源養子とよとわ

とれわつてき 養子のわやいれきよといひ

よのきよ君されととれいつき地まき有る

まれしにまれしとたごくのねらるわの

中なるらよと恒路やたこのちうらなと

らうあれ年妻るるといぬいつていさ

かひあつらひいさ















今言れぬやうに

懐妊の事

三月より四月、四月より六月まで三ヶ月で

一本六月とあり、みか月と續つた。六月也

元は六月と有り、六月と續て冷泉院十六月也

始と云流るる事、流り也。十一月より生れ給也

六月より、人へ行きて養ひ給ふ事也

三月流るる事、源氏の事也

并令給、二人の名也。行内ちの御代也

青表紙の年の令給と云ふ一人也。王命

也。むらもや。但二人よもや。むらもや

内より御代の事、今より内より養ひ給ふ事也

見たりともこの事、まゝくもまゝの御代也

中より君も、源也

さゆとれる事、けり末の事よりして

さゆとれる事、源氏の天子は父たる事也

たふめありて、死鳥了也

七月より、懐妊四月もさる事也

懐妊四月もさる事也、むらもや

懐妊の事也

秋よりさる事也











わめしうなる さしちを尋ねて 葎壺

名譽との御をさす

井いんをさすい をいんわつとあつとあ

こつ草河をいんあつとあつとあ

あつとあつとあつとあ

多分とつとあ 深切とあつとあ

ちつとあつとあつとあ

つとあつとあつとあ

つとあつとあつとあ

つとあつとあつとあ

十月の 紅葉が尽くあつとあ

並や 紅葉が尽くあつとあ

朱葎院 仲の化回をさす

山とあつとあつとあ

つとあつとあ 九月

世の人のたつとあ

あつとあつとあつとあ

こつとあつとあつとあ

京のつとあつとあ

葎壺とあつとあ







まゝのうらみ海のか紙をちるわらぬ  
るれこしうえりあさこころは相坂  
けあめ何用くさるやけ難あま侍  
いさ海一さくあそいらたほ  
君いんをさくま  
まのたしき次父交也  
まよあし紙と 海の句  
ちちとの紙 いまの紙  
いさ海一さくあそいらたほ  
君いんをさくま  
まのたしき次父交也  
まよあし紙と 海の句  
ちちとの紙 いまの紙

海は海なる地を流すのよ

いさ海一さくあそいらたほ  
君いんをさくま  
まのたしき次父交也  
まよあし紙と 海の句  
ちちとの紙 いまの紙  
いさ海一さくあそいらたほ  
君いんをさくま  
まのたしき次父交也  
まよあし紙と 海の句  
ちちとの紙 いまの紙



あけぬる女侍 源の御

交中御むくよか御のしや父交よちら  
むくまのくまもや

この年十九日 十月下旬の幸に御を

きよのりきせら 源の御もしし父交を

田力十 御名儀の御をさかうて

由とのまら 交てまわさる

い志のりてかむゆふ 離るあ

細ほち とも 催馬手やこい路ち

子あさうねり

走とまわ けされまあの戸さ

まこいそく侍の御はこあは走とゆり

ゆくとけ 御油徳の御らまき 奉女ま

今もあく 御ゆふは行のうもあま

書るこころ 筆先乃あこまらあ

きうのうら 書ら

くやうゆま してまきのごる

かこいあま 尋常乃は御の又ハカ

りてまら せんあまあ

のいあ 父交の御あ



あはれと云ふは 局としてあるは

と海を交りてききせ給ふ也

君をけりて 兄やいとまゝ(原)

あはれと云ふ 海のうらや

と云ふは 父交の約也 云々

あはれと云ふは 父交の約也 今ちと云

と云ふは 父交の約也

と云ふは 父交の約也

と云ふは 父交の約也

と云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也

あはれと云ふは 父交の約也







交下しせ 源のむね

ちよかに かのむね

君りり終く 源のゆいり終

いさしき 尺さしき 源のむね

のむね 源のむね

交のゆい 父交と思

ちよかのむね 世より

よしせらむ 源のむね

しきしき 衣架れら

二条院 二條院は法皇院は准母

乃とゆり 乃とゆり

えいせあり うれいせ

かろうあん かのむね

交のむね 父交のむね

たのむね 母も祖

なれ終く 源のむね

源のむね 源のむね

源のむね 源のむね

あしき 源のむね

あしき 源のむね



たがひもいふしきつら子 二葉院の教人  
のまゝおぼしきつら子 二葉院の教人  
思ふるも

さるくましく 故の人をあはれ  
女心やく解る 花も男女婚姻賦源

英明の撰也 故に相云作也  
下く 花も并ては花よひ交 花も玩を

可むめひ交を思ふも  
東のたつこも花も方に 源の東のたつこ

秋のこも花も同じ葉とのまも花  
下く 花も并ては花よひ交 花も玩を

しき 野とく 花も并ては花よひ交  
こも花も并ては花よひ交 花も玩を

花も并ては花よひ交 花も玩を  
花も并ては花よひ交 花も玩を

花も并ては花よひ交 花も玩を  
花も并ては花よひ交 花も玩を

花も并ては花よひ交 花も玩を  
花も并ては花よひ交 花も玩を

花も并ては花よひ交 花も玩を  
花も并ては花よひ交 花も玩を







